

建築文化賞

一般建築物

建築主：学校法人東京理科大学
設計：株式会社竹中工務店
施工：株式会社竹中工務店
所在地：野田市山崎2641

先端技術の建築的インキュベーター

東京理科大学総合研究機構 光触媒国際研究センター



鳥瞰

(撮影/小川 泰祐)

5

大学で教育・研究をする者として、その具体的な研究内容が建築的に解釈され実施に移された例をあまり多くは知らない。固定化された研究内容の器でありつづけることが比較的稀であるからだ。それに対して、ここでは「光触媒」という先端的な素材を介して、建物の機能とも深く関わる今日のテーマの建築的翻訳が課題であった。よく見れば、その「国際研究センター」を新設するにあたり、ユーザーと設計者・施工者は限られた予算の中で、この課題に真摯に向き合ったことが了解される。

結果的に極めて精緻なディテールや施工精度が、この大学施設の品位と存在を高めていることは言うまでもない。そして、光触媒を塗布した外壁パネル縦ルーバーが設備機器用バルコニーの外側に周到に配置され、キャンパス内の主動線側にリズムと陰翳を与えている。また、反対側の立面には光触媒タイルによる精度の高い平滑な仕上げが施され、ランダムな配置のガラスブロックとともに、全体として合理的で単純明快な幾何学的ボリューム

ムに控えめながらも印象的な姿を見せている。この取り組みは、大学施設で課題となる清掃やメンテナンスにも大きく寄与することだろう。

一方、室内に目を転じれば、仕切りのないオープン形式の研究室空間が注目される。センター長からの要請で従来のタコつぼ型を廃し、相互の交流やコラボレーションが自然になされるような試みとして実施に移された。時には必要とされる個別の研究環境がどのように確保されるのか疑問だが、今後の運用で、試行錯誤を経ながらどう使われていくのか興味深い。

(岩村 和夫)



産学官の連携を促す、一体化した共用空間(研究居室)



光の粒子性を表すファサード(東外観・住宅街側)